

## 第26回

### マンツーマン入浴

近畿大学 建築学部  
准教授 山口 健太郎



#### 【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

高齢者入居施設では、多床室大規模型から個室ユニット型への転換と合わせて入浴介助も流れ作業介助からマンツーマン入浴へとシフトしている。入浴介助には個別の介護技術だけではなく、人員配置や建物など複数の要因が影響してくる。そのため個室ユニット型施設でも、マンツーマン入浴の意義が十分に伝わっていない場合が多い。そこで今回は、入浴介助のシステムおよびマンツーマン入浴の効果について述べる。

#### ①流れ作業介助：(図1左)

介助の仕組み：誘導→脱衣→入浴→着衣→誘導という入浴に関する作業を職員が分担して行う方式。脱衣室内で着脱を行う外介助と、洗体・入浴を行う中介助、そして、居室から浴室までの誘導係に分かれる。

建物の仕組み：浴室は集中配置、建物内に1箇所という場合が多い。浴室・脱衣室は広く、浴室には複数台の浴槽が設置されている。浴槽の種類は大浴槽や臥位式機械浴槽、チェアインバスなどが主流となり、軽度の人向けの浴槽か、重度の人向けの浴槽に分かれる。

#### ②マンツーマン入浴：(図1右)

介助の仕組み：1人の高齢者に対する誘導、着脱、入浴という全行為を一人の職員が行う方式。担当の介護者が居室に訪問し、高齢者と一緒に衣服を選び、浴室に移動する。

建物の仕組み：浴室は施設内に分散配置、ユニット型施設では各ユニットに1箇所の浴室が設けられている。浴室、脱衣室の広さはそれぞれ概ね10㎡程度(3m×3m)であり、家庭用ユニットバスの1.5倍から2倍ぐらいの広さとなる。浴槽は、個浴もしくはイス昇降式の機械浴槽を取り入れる場合が多い。

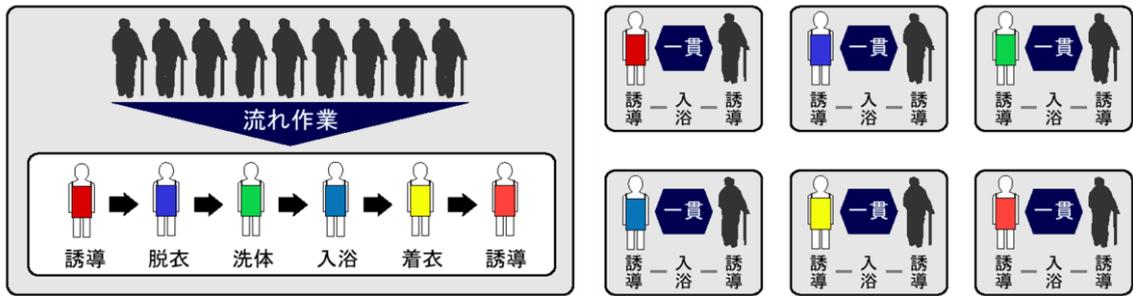


図1 流れ作業方式（左）とマンツーマン入浴方式（右）のシステム図

次にこのような仕組みの違いがケアに与える影響について調査結果をもとに解説していく注 1)。工場における流れ作業は、物が止まることなく動き続けるほど効率が高まる。入浴介助でも利用者が止まることなく様々な介助を受けることができる方が効率的となる。だが実際には様々な場面において待機時間が生じている。例えば、前の人がお風呂に浸かっているから脱衣室で待つ。シャワーが終わったのに浴室が空いていないから待つ。など至る所で待ち時間が生じている。このような脱衣室と浴室での待機時間を合算したのが図2となる。1日あたりの合計は110分、詳細をみると全裸の状態が約20分、半裸（上半身もしくは下半身）の状態が約30分となる。ここで職員があわただしく動いている脱衣室内で自分が体を隠すこともできないまま全裸の状態で待たされることを想像してもらいたい。おそらく寒い、恥ずかしい、もう嫌だという気分になるのではないだろうか。

それがマンツーマン入浴の場合、待機の時間は14分まで減少し、一人あたりに換算すると1分程度となる。マンツーマン入浴では、待機により生じる寒さや、恥ずかしいなどの精神的な苦痛を軽減することができる。

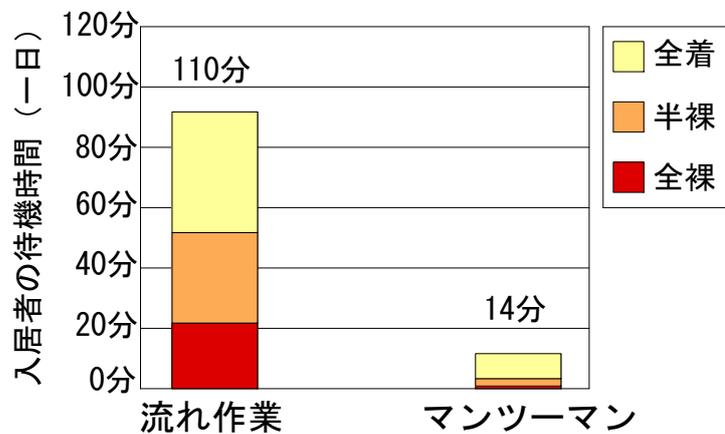


図2 脱衣室・浴室での利用者の待機時間

次に図3は、入浴介助中の利用者に対する直接介助時間および、1人の職員が1日に入浴介助を行う利用者数である。流れ作業介助では、脱衣担当、入浴担当というように分担されているため多くの利用者に対して介助を行う。調査施設では1日に5人以上の利用者を担当しており、1人の利用者に対する直接介助時間は12分であった。マンツーマン入浴では、すべての介助を一貫して行うため

に1人の利用者とかかわる時間は27分となり、1日に担当する利用者は3人となった。このようにマンツーマン入浴では少人数の利用者に対して長時間連続して関わり続けることができるようになった。30分の介助中には様々な会話が生まれ、また、硬縮など体の状況の把握もできる。利用者の状況を把握しやすくなれば、より質の高い入浴介助を実施できるようになる。利用者にとっても、同じ職員と会話をしながらの入浴であれば、安心することができ、入浴拒否を未然に防ぐことができる。

さいごに図4は利用者が浴槽に浸かっている時間のグラフである。流れ作業介助時には6分に入浴時間が集まっている。その要因について職員にヒアリングしたところ「どの利用者もおおよそ6分ぐらいが目安になっています」という回答であった。つまり職員は職員の視点から入浴時間を決めていたのである。それが、マンツーマン入浴の実施後は入浴時間のピークがなくなり、なだらかなグラフとなる。一般的にお風呂に浸かっている時間には個人差が大きい。流れ作業介助では、個性が喪失され画一的なケアがなされていたが、マンツーマン入浴では直接的な関わり時間の増加などにより個人が見え、個性に応じたケアが提供できるようになった。施設においては様々な介助が実施されているが、意外と一人の利用者に対して連続的に関わる時間を確保することは難しい。入浴介助は唯一このような時間が取れる介助であり、入浴ケアの改善は、ケア全体を変えていくことができる可能性を持っている。

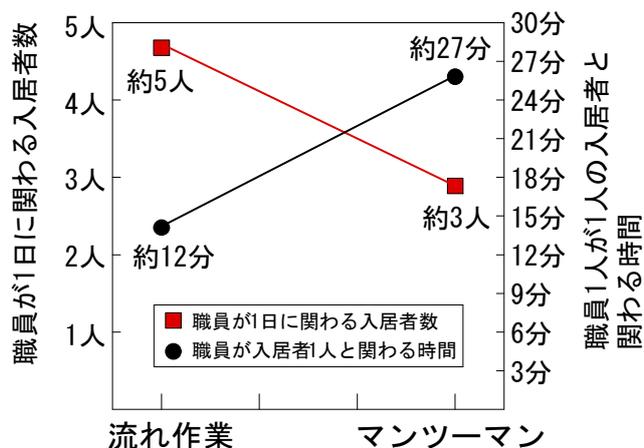


図3 1人の利用者に対する直接介助時間と担当利用者数

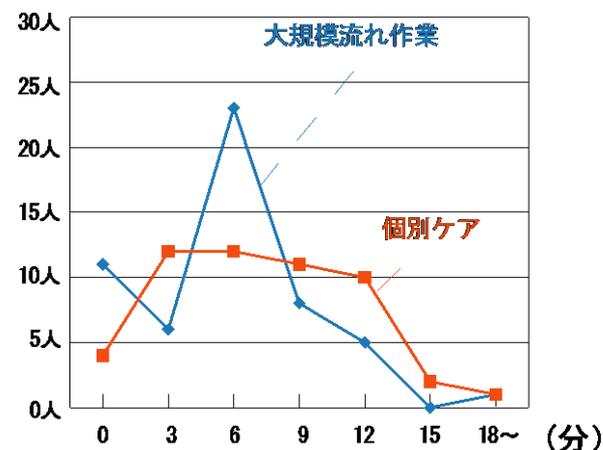


図4 入浴時間

注1) 山中直、山口健太郎、三浦研、高田光雄、齋藤芳徳：個別入浴を想定したケアと空間が高齢者に与える影響—特別養護老人ホームにおける入浴に関する研究(その1)—日本建築学会計画系論文集、第599号、pp.49-56、2006.1